慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ハーディネス, ストレッサーと心理的健康との関係性 : 管理職者を対象にした調査研究
Sub Title	Relationship of personality hardiness, stressor, and psychological health : study of executives
Author	小坂, 守孝(Kosaka, Moritaka) 吉田, 悟(Yoshida, Satoru)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1992
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.34 (1992.) ,p.43- 50
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000034-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ハーディネス，ストレッサーと心理的健康との関係性：管理職者を対象にした調査研究

Relationship of personality hardiness, stressor, and psychological health: Study of executives

小　坂　守　孝
Moritaka Kosaka
吉　田　　悟
Satoru Yoshida

Hardiness, the personality trait composed of commitment, control and challenge, is supposed to be an active stress-resistance resource. A retrospective study examined the relationship between stressor and psychological outcomes with regard to the moderating effects of hardiness.

Subjects were 341 male middle level executives. They completed four self-reported measures (hardiness, psychological status, work stress, stressor). There were significant main effects of two independent variables, but stressor-buffering effect were not significant. After all, under a given stressful condition, executives high in hardiness scored lower psychological distress than low in hardiness.

The findings suggest that the hardy person might be relatively high in psychological health. Finally, various areas for future research are briefly discussed.

従来ストレス研究では，人間は環境に受動的に反応するに過ぎない存在であるという仮定を暗黙の了解のうちに採用してきた。その証拠に，ストレッサーは有害であるので健康などの結果変数に有害な影響を及ぼすという図式（ストレッサー→健康状態の悪化）が大多数の研究で採用されてきた。

だが実証研究を検討してみると，ストレッサーと健康状態との相関関係のレンジは .20～.78 で，大半は .30 以下である (Rabkin & Struening, 1976)。つまり，先行研究での結果はストレッサーが健康状態の分散を 9% 程度 (r=.30 だから R^2≦.09) しか説明づけないことで一致しているのである。Schedule of Recent Experience (SRE), Social Readjustment Rating Scale (SRRS) といったストレッサー尺度 (cf. Zimmerman, 1983; 植村, 1985) の信頼性，妥当性がある程度保持されていることを前提にすれば，このことはストレッサーの得点が高いにもかかわらず，健康状態が悪化しない被験者が存在する可能性，すなわちストレッサーが及ぼす影響には個人差があるかもしれないことを示唆している。従って，研究の焦点を被験者集団の平均像に当てるよりもむしろ個人差へと転換することが必要と思われる。

本研究の目的は，ストレッサーが及ぼす影響には個人差があるという可能性を，従来採用されてきた緊張低減（あるいは動因低減）モデルではなく，緊張追求傾向を包括した能動論的視点から検討することである。

能動論的視点は二つに大別できるだろう。一つは人間性心理学者，実存主義指向の心理学者 (ex. Allport, 1955; Fromm, 1947; Maddi, 1970; Maslow, 1970; Rogers, 1961; White, 1959; cf. Maddi, 1989) が立脚する成就 (fulfillment) 的立場である。この立場は一致して，人間は本来成長へと動機づけられており，安定指向的な存在ではないとする。すなわちこのモデルは，成長を求める力だけが人間に基本的に存在する力であると仮定しているのである (Maddi, 1989)。

もう一つに，内発的動機づけ論 (ex. Deci, 1975; Hunt, 1956) の立場がある。この立場は，個体には有能感と自己決定感を求めようとする一般的欲求が中枢神経系にあり，このような欲求の絶えざる充足こそが個体の能動性を保障するものであるとする。そして有能感，自己決定感を得るためには，適度なチャレンジ（あるいは

不適合）を求め，このチャレンジを征服するという2つの機制が平行かつ協調的に働くことが必要であると仮定している。この立場からストレッサーとパーソナリティ，心理的健康の関連性を検討した研究に吉田(1991)がある。

本研究は，成就的立場から構成されたパーソナリティ特性であるハーディネス (Kobasa, 1979 b) に注目する。従来，ストレッサーの緩衝要因研究が注目されてきたが，ハーディネス (ex. Kobasa, 1979 a, 1979 b; Kobasa *et al.*, 1981; Kobasa *et al.*, 1982) も，社会的支援，コントロール感などと共に米国において検討されてきた。しかし，わが国においては殆ど注目されてこなかった。

ハーディネスという特性は，成就的立場とりわけ実存主義的な立場に立脚している (cf. Maddi, 1988, 1989)。それによると，人生は決定の連続であり，人間は自分の置かれた世界や自分自身に深く関与しながら，一つ一つの決定に責任を持つ勇気を兼ね備えることによって，自分に与えられた不変の事実（事実性）と自分の努力で変えることができる物事（可能性）とを正しく認識し，事実性を受け入れた上で，可能性を追求していくことができるとしている。つまり，個人は環境の求める挑戦に応じて立ち上がることが可能であり，生活（人生）上の困難な出来事を，個人が成長したり，利益を得たりする可能性やチャンスに転ずることができると仮定されている。

Kobasa (1979 a, 1979 b) は，このような能動的かつ楽観的な個性的な構えがコミットメント，コントロール，そしてチャレンジの三つの特性によって構成されると仮定し，この3つの要素がストレッサーに抵抗力があるパーソナリティ特性を構成すると考えた。コミットメント，コントロール，そしてチャレンジは，Kobasa (1979 b) によって，それぞれ「自分の生活の様々な領域にコミットしていると感じる傾向」「生活上の出来事に対してコントロール可能であると認知する程度」「予期しなかった変化や脅威となる可能性のある事態を有害な出来事としてよりも，むしろ将来の成長のためにプラスになるチャレンジと見なす傾向」と定義された。そしてこれらの特性の総体がハーディネスと名づけられた。

仮　　説

仮説：ハーディネス高群は低群に比べて，ストレッサー高条件において，相対的に心理的状態が良好で，対仕事ストレスが低い。

つまり本研究は「ストレッサーが及ぼす有害な効果をハーディネスが緩衝する」かどうかを実証するものである。米国において，従来ストレス研究はストレッサーを和らげる要因を見いだそうと努めてきた。ハーディネス研究もこのストレッサー緩衝要因の一つとして 70 年代末 (Kobasa, 1979 a, 1979 b) 以来注目を集め，20 以上の実証研究（ハーディネス，ストレッサー，および心理的・身体的健康との関係性）が報告されている。だが，その結果は混乱している (cf. Cohen & Edwards, 1979)。従って，本研究の意図は，ハーディネスを従来通りストレッサーの緩衝要因としてモデル化すべきか，それとも主効果モデルがより好ましいかを判断することである。

方　　法

1. 調査の対象および時期

上場企業の中間管理職者 2000 人に質問紙が郵送されそのうち 400 人が回答し（回答率 20%），全て男性であった。質問紙は 1991 年 3 月 13 日に発送され，3 月 26 日までに到着した分を調査対象者とした。そのうち59人に記入もれがあったため分析から除外され，最終的に分析対象者は 341 人となった。

2. 尺　度

質問紙は，ハーディネス尺度，ストレッサー（ライフイベント）尺度および心理的状態，対仕事ストレスの尺度によって構成されている。

(1) ストレッサー

ストレッサー尺度として最も頻繁に使用されている社会的再適応尺度 (SRRS) (Holmes & Rahe, 1967) から，重みづけが高いこと，わが国の中年サラリーマンに比較的関係があるという見地から 11 項目を選択した。さらに6項目を独自項目として加えた。被験者はこれらの項目のうち過去6カ月以内に遭遇した出来事をチェックするように求められた。ストレッサー尺度の重みづけは，SRRS の LCU (Life Change Unit) 得点を参考にして決定された（表 1 参照）。ストレッサーの得点は，17 項目の各重みづけ総合得点である。この得点は，出来事のもつ心理的な意味や情緒，社会的な好ましさを示しているのではなく，出来事発生以前の安定状態からの個人を超えた客観的な変化を反映している。レンジは 0～405，平均値は 88.94 で中央値は 65.37，標準偏差は 78.48 であった。得点は中央値で高群と低群に二分化され，このカテゴリーを変数として使用した。

(2) 心理的状態，対仕事ストレス

心理的状態は STAI (Stait-Trait Anxiety Inventory) 日本語版（清水，今栄，1981）の特性不安尺度 (20

表 1　ストレッサー尺度の重みづけ

項目	得点
1．配偶者が亡くなった	100
2．離婚あるいは別居した	70
3．両親などを含め近親者が死亡した	65
4．重い病気などで入院した	55
5．家族の誰かが入院した	45
⑥．親の扶養問題や同居問題がもちあがった	35
⑦．子供が学業面(受験，成績不振)や生活面(非行，登校拒否など)において問題を起こした	35
⑧．体力の衰えを切実に感じることがあった	25
9．夫婦間のスレ違いから夫婦げんかが増えた	35
10．転勤や配置転換があった	35
⑪．単身赴任をした	35
12．親戚や近所と関係が悪くなった	30
13．妻が就職したりあるいはパートづとめを始めた	25
⑭．職場内の人間関係でトラブルがあった	30
15．昇進した	30
16．500 万円以上の借金をした	30
⑰．残業や休日出勤が増えた	25

注）○で囲った項目番号は独自項目を示す。

項目，4 段階評定）が使用された。最近の研究では，情緒障害の治療を受けていない人を対象にした場合，不安，抑うつや他の情動障害の尺度との間に強い相関関係が実証された (Gotlib, 1984; Tanaka-Matsumi & Kameoka, 1986; Watson & Clark, 1984)。これらの研究は，情動障害のない人を対象者にした場合，不安，抑うつや他の情動障害の尺度は，個々の尺度名が示すような特定の情動障害よりも，むしろ単一の全体的次元を測定していると見なすことが最良であろうと結論づけている。本研究の調査対象者は会社の管理職者であり，心理的治療を受けている人々ではないので，いかなる情動障害尺度を使用しようとも全体的な心理的状態の良好性を測定していると考えるのが好ましいであろう。先行研究で提示された代表的な六つの情動障害尺度の α 係数，尺度間の相関係数 (Tanaka-Matsumi & Kameoka, 1986, p. 330 Table 2) を参考にして，内的整合性が高く，尺度間相関係数の平均値が最も高い，すなわち特定の状態よりも全体的次元を反映する，STAI の特性不安尺度を使用することとした (α=.90，尺度間相関係数の平均=.63)。実際，本研究においても内的整合性は α=.84 で保持されている。尺度値は各項目の評定点の合計点で，レンジは 28～55 で，平均値は 40.67，そして標準偏差は 4.94 である。

対仕事ストレス尺度は，白樫 (1988) の対仕事ストレス尺度 (10 項目) のうちの 6 項目を採用し，評定尺度を STAI に合わせて 4 段階とした。ストレッサー尺度が安定状態からの客観的変化の程度を反映しているのに対して，対仕事ストレスは主観的・認知的尺度で，本研究においては，仕事に対して各被験者が認知している問題性の程度を反映するものと仮定している。α=.64 で内的整合性にはやや欠ける。尺度値は各項目の評定点の合計点で，レンジは 6～21，平均値は 11.78，標準偏差は1.89 である。

(3)　ハーディネス尺度

本研究では，ハーディネス尺度の最新版である 50 項目版 (Kobasa との私信，1991. 1. 7) を日本人の被験者向けに翻訳と若干の修正を加えたものが使用された。過去に使用された主なハーディネス尺度は，71 項目版 (ex. Funk & Houston, 1987; Kobasa & Puccetti, 1983; Kobasa *et al.*, 1983; Kobasa *et al.*, 1985; Schmied & Lawler, 1986; Wiebe & McCallum, 1986)，36 項目短縮版 (ex. Allred & Smith, 1989; Hull *et al.*, 1987; Rhodewalt & Agustsdottir, 1984; Rhodewalt & Zone, 1989) である。このように各研究ごとに使用された尺度が異なることは，現在，先行研究結果の解釈をする上で負担となっている。また，上記の 2 種類の尺度を比較すると，ハーディネスの三つの構成要素を測定すると仮定された各下位尺度の項目数が大きく異なっている。71 項目版は，コミットメント項目が 24，チャレンジ項目が 15，コントロール項目が 32 であり，一方 36 項目短縮版は，コミットメント項目が 12，チャレンジ項目が 8，コントロール項目が 16 で，双方ともチャレンジ項目数はコントロール項目数のおよそ半分である。このような下位尺度の項目数の違いは，71 項目版を使用した研究の多くがチャレンジ項目得点を 2 倍してチャレンジ得点としていることを割り引いたとしても，ハーディネスの占める各構成要素の重みが異なることを示唆するものである。また，71 項目版においてハーディネスの合計得点を算出する際に，各下位尺度を Z 得点化してから加算していることで，他の研究とのハーディネス得点の比較が不可能であることや，チャレンジが正しく測定されていないという問題も指摘されている (Hull *et al.*, 1987)。最新の 50 項目版はこれらの問題を克服すべく作成されたものである (Maddi, 1987)。この尺度は，コミットメント項目が 16 で他の 2 つの下位尺度は各 17 項目である。

この尺度は本来 4 段階評定だが，項目数が多いことから本研究では 2 段階評定 (はい＝1 点，いいえ＝0 点)

表 2　ストレッサー，ハーディネスの各カテゴリーにおける従属変数（心理的状態，対仕事ストレス）の平均値，標準偏差

従属変数	①心理的状態		②対仕事ストレス	
	ハーディネス高群（N=179）	ハーディネス低群（N=162）	ハーディネス高群（N=179）	ハーディネス低群（N=162）
〈全体〉(N=341)	平均=39.20 標準偏差= 4.71	平均=42.30 標準偏差= 4.68	平均=11.41 標準偏差= 1.75	平均=12.17 標準偏差= 1.97
ストレッサー高群(N=168)	平均=40.23 標準偏差= 5.04 N=84	平均=43.46 標準偏差= 4.66 N=84	平均=11.75 標準偏差= 1.83 N=84	平均=12.35 標準偏差= 2.02 N=84
ストレッサー低群(N=173)	平均=38.29 標準偏差= 4.22 N=95	平均=41.05 標準偏差= 4.39 N=78	平均=11.12 標準偏差= 1.63 N=95	平均=11.99 標準偏差= 1.91 N=78

とした。尺度値は各項目の評定点の合計で，尺度値が大きいほどハーディネス傾向が強いと評定されている。レンジは 18～48，中央値は 36，平均値は 35.43 で，標準偏差は 5.35 であった。α=.70 で内的整合性は辛うじて保持された。この尺度値は，中央値以上の群がハーディネス高群，中央値より小さい群がハーディネス低群と操作化された。

結　　果

2つの独立変数との相関係数は有意だったが弱かった（ストレッサーとハーディネス：r=−.16，p<.05）ので，要因間の独立の前提をある程度保持していると考えた。仮説を検証するために，2つの従属変数（心理的状態，対仕事ストレス）に対して分散分析が実施された（完全無作為要因計画・各セルのデータ数=78）。この 2 タイプの分散分析を行うにあたって，表2に，ストレッサーハーディネスの各カテゴリーでの2つの従属変数の平均値，標準偏差を提示する。また，ハーディネス尺度の妥当性の検討のため，因子分析（斜交回転：プロマックス法）（cf. Hendrikson & White, 1964）が実施された。

(1)　2×2 の分散分析

まず，2×2の分散分析が心理的状態値に関して実施された。この結果は表3に提示されている。ストレッサーとハーディネスの交互作用は有意ではなかった（仮説不支持）。だがストレッサー，ハーディネスの主効果とも有意であった。更により詳細な分析をしたところ，ストレッサー高条件においてハーディネス高群は低群よりも有意に心理的状態値が良好だった（2群間の平均値の差=

表 3　従属変数が心理的状態での 2×2 の分散分析（完全無作為化要因計画）

各セルのデータ数=78

〈効果〉	平均平方	F値	自由度	有意水準
①ストレッサー	329.23	16.04	1	0.001
②ハーディネス	761.53	37.10	1	0.001
③ストレッサー×ハーディネス（仮説）	14.67	0.72	1	NP
④誤差	20.52		310	

NP：有意差なし

表 4　従属変数が対仕事ストレスでの 2×2 の分散分析（完全無作為化要因計画）

各セルのデータ数=78

〈効果〉	平均平方	F値	自由度	有意水準
①ストレッサー	13.18	3.97	1	0.05
②ハーディネス	44.34	13.35	1	0.001
③ストレッサー×ハーディネス（仮説）	0.08	0.03	1	NP
④誤差	3.32		310	

NP：有意差なし

表 5　ハーディネス尺度各項目の因子負荷量（斜交回転；N=341）

	項目番号・内容	因子 1	因子 2	因子 3
	(コミットメント項目)			
1.	その昔不本意ながら中断した習い事に再び取り組もうとよく考える	…	…	…
8.	活発に仕事をしている自分の姿は想像できない	…	…	…
11.	生活のためだけに働いている人は，たいてい上司の言いなりだ	…	…	.34
14.	どんなに一生懸命働いても目標には決して届かない	.40	…	…
17.	どんなに一生懸命働いても，結局は上司だけが得をする	.53	…	…
20.	最も刺激的なことは空想にふけることである	.26	…	…
23.	自分の仕事を本当に楽しみにしている	…	.41	−.31
26.	新しい自分を発見するのはとてもすばらしいことだ	…	…	−.23
29.	自分が何からも拘束されず自由だと思うと，欲求不満や不幸を感じる	…	…	…
32.	仕事に全力を注ごうと注ぐまいと大した差はない	.41	…	−.20
38.	人生の大半を無意味なことに費やしている	.42	.23	…
39.	自分自身の意見は実はわからないことが多い	…	.29	…
41.	毎日のおきまりの仕事は退屈なだけでやる気がしない	…	…	…
44.	自分の仕事が社会の役に立っているなどと言う人は信用がおけない	.42	…	…
47.	個性なんか，自分を他人に売り込むことにしか役に立たない	.49	…	…
50.	政治家は我々の生活を左右する	…	.31	…
	(コントロール項目)			
3.	上司はたいてい私の言うことに耳を傾けてくれる	.22	.29	…
4.	あらかじめ計画を立てれば問題は生じないものだ	…	.26	−.26
5.	事前に対応することにより，将来起こり得ることに上手く対処できるといつも感じる	…	…	−.28
7.	どんなに一生懸命やってみても自分の努力はむくわれない	.36	…	…
10.	たとえ配偶者であれ他人の意見を変えることはほとんど不可能だ	.32	…	…
13.	結婚して子供ができると，人生における選択の幅が少なくなる	…	.31	…
16.	人生において遭遇する出来事には，たいてい何らかの意味がある	…	…	.38
19.	物事は決してうまく運ばないので頑張っても無駄だ	…	…	…
22.	計画を立てたら，たいていはそれを実現させる自信がある	…	.47	−.25
25.	手に負えない難問にあたって，タイミング良く助けを求められる	…	.31	…
28.	友人の意見を変えることは常にとても難しいことだ	…	−.25	.20
31.	間違いを犯したら，おそらく自分で元通りにはできないだろう	…	.25	…
34.	問題を処理する最善の方法は，そのことについて考えないことだ	.23	…	…
35.	運動選手の大半は，生まれながらにして運動が得意である	…	…	…
42.	他人が私を怒る時，きまって正当な理由などまったくない	.49	…	…
45.	私を傷つけようとする人を止めさせることはほとんどできない	.33	.23	…
48.	仕事の上で叱責された時，それが不当だと感じることが多い	.28	…	…
	(チャレンジ項目)			
2.	仕事はバラエティに富んでいる方が好きだ	…	…	…
6.	毎日のスケジュールがちょっとでも変わると不快だ	…	…	.22
9.	何をやるにも，確実なことを実行するのが一番いい	…	…	·23
12.	個人の利益より公共性を優先するような法律は好ましくない	…	…	…
15.	ごくまれな変化でさえ気になる人は，明確な基準に頼りがちだ	…	…	…
18.	頭の悪い奴と話をしても無駄だ	.43	…	.22
21.	相手の質問の意図がわからない限り，それには答えたくない	.20	…	.33
24.	現在取り組んでいることが，何らかのことで中断されてもあまり気にならない	…	…	…
27.	先のことを見通せる人と一緒にいるのは楽しい	…	…	−.22
30.	不測の事態によって習慣が乱されると，どうしていいかわからない	…	.31	…
33.	規則は自分を指導してくれるもので尊重する	…	…	.40
36.	はっきりしないことや予測できないことは好きではない	…	.26	.36
37.	最善を尽くす人は社会から十分に支援されてしかるべきだ	…	…	.32
40.	事実と密接な関係がない理論は，まったく役に立たない	.20	…	.26
43.	習慣が変わると当惑してしまう	…	.51	.24
46.	日常生活の大半はほとんど退屈だ	.24	.32	…
49.	老人になったら必ず誰かに世話をしてもらいたい	…	.23	…

注）・因子負荷量は 0.20 以上を記載し，小数第三位を四捨五入した。
・逆転項目（項目番号 6-21，28-50）の得点は，ハーディネス傾向の強さを示すように統一されている。

3.23; t (1,166)=−4.30, p<.001)。ストレッサー低条件においても同様であった（2群間の平均値の差=3.10; t (1,339)=−6.08, p<.001)。

同時に，2×2の分散分析が対仕事ストレス値に関して実施された。この結果は表4に提示されている。心理的状態の分析と同様に，交互作用は見いだせず，仮説は支持されなかった。だがストレッサー，ハーディネスの主効果とも有意であった。さらにより詳細な分析をしたところ，ストレッサー高条件において，ハーディネス高群と低群間で，対仕事ストレス値に有意な差が見いだされた（2群間の平均値の差=0.60; t (1,166)=−2.04, p<.05)。ストレッサー低条件においても同様の結果が得られている（2群間の平均値の差 =0.76; t (1,339)=−3.77, p<.001)。

(2) 因子分析

斜交回転による因子分析（プロマックス法）がハーディネスの全項目に対して実施された。表5に各項目内容と因子負荷量が提示されている。主に因子1の正の特性を反映している項目は 14 項目，因子2では 13 項目，そして因子3では9項目であった。また主に因子3の負の特性を反映する項目は3項目であった。因子2の正の特性と因子3の負の特性を反映している項目が1項目あった。そしていずれの因子の特性をも反映していない項目は 10 項目であった。だが，コミットメント，コントロール，チャレンジの各特性は必ずしも因子 1，因子 2，因子3には対応していなかった。因子1と因子2の相関係数は 0.28，因子 1 と因子 3 の相関係数は 0.15，因子2と因子3の相関係数は −0.08 であった。因子 1〜因子3の固有値は各々 4.62, 2.75, 2.13 で，3 因子の寄与率は 18% であった。

考　　察

心理的状態と対仕事ストレスを従属変数として分析した2つの分散分析において，仮説は支持されなかった。このことは，交互作用がないことを示唆していると考えられる。だがハーディネス，ストレッサーの主効果が2つの従属変数において有意であった上に，ハーディネスの F 値はストレッサーの F 値よりも大きかった（心理的状態では 2.3 倍，対仕事ストレスでは 3.4 倍)。つまりハーディネスの主効果はストレッサーの主効果よりも相当大きいと考えられる。そしてより詳細な分析をしたところ，ストレッサー高条件，低条件の双方においてハーディネス高群は低群よりも有意に心理的状態が良好で，対仕事ストレスが低かった。以上の結果より，以下の2つの見解が導き出される。

① ハーディネスは，ストレッサーの影響を緩衝しない。

② ある一定のストレッサー条件において，ハーディネスが低い人は，相対的に心理的状態，対仕事ストレスが良好でない。

本研究で見いだされた見解は，ストレッサー，ハーディネス，および精神的・身体的健康の関係性についての研究枠組を，ストレッサー緩衝効果の研究から，パーソナリティ主効果のモデルに転換すべきであることを示唆している。米国で行われたハーディネスの実証研究の大半が，本研究同様にストレッサーとの交互作用は見いだされず，一致してハーディネス特性の健康に対する主効果を報告している (cf. Funk & Houston, 1987; Hull *et al.*, 1987)。従って今後，緩衝効果に焦点を置いたモデルよりも，パーソナリティの健康に対する主効果に焦点を合わせて理論化していくことが必要であると思われる。加えて，ハーディネスの保持が対処柔軟性を促進することによって，間接的に心理的状態および対仕事ストレスの良好性に寄与するのかもしれない。今後このような間接モデルの検証も必要であると思う (ex. Kobasa, 1982)。

一方，ハーディネスの緩衝効果が見いだされなかったのは，ストレッサー尺度に問題があるのかもしれない。例えば，本研究においてストレッサーと仮定した生活上の出来事は，平均的・中性的な項目であり，個々人の価値に関わるような特定の問題ではないので，例えばハーディネス傾向が強い人でも，本研究で使用したストレッサー項目に対してコミットすべき課題，チャレンジ課題とは認知されなかったのかもしれない。さらに，本研究の被験者は全般的に深刻なストレッサーに直面していない（ライフイベント数の平均2回）ので，ストレッサーに対して認知的であれ，行動的であれ，対処努力する必要がそれほどなかったのかもしれない。この2つの問題を解決した後，緩衝効果の有無を再度検定すべきである。

さらに検討の必要があるのはハーディネス尺度自体の問題である。因子分析の結果，コミットメント，コントロール，チャレンジの各特性は因子1から因子3のうちの特定のある因子を反映しているというわけではなく，3つの因子にわたって影響を及ぼしているがその程度には差があり，これでは「適度に内部相関のある3つの因子が得られた」(Maddi, 1987, p. 104) とは言い難い。また，どの因子も反映していない項目が全 50 項目中 10

項目もあった。これによって尺度の信頼性が下がっていると思われる。また，本来4段階評定の尺度を2段階評定としたことで分散の変化のしかたに影響を及ぼした可能性も十分にあり，それが因子分析の結果やハーディネス得点の分布に影響したのかもしれない。今後本尺度を4段階評定で測定したうえで検討する必要がある。

本研究が横断的研究であることは，方法論上問題である。横断研究は ① 因果関係を殆ど特定できないし，② 測定以前の精神的・身体的状態がパーソナリティおよび現在の精神的・身体的状態の原因であると結論づけることはできない。このため，測定時点を複数にした縦断的研究を行うことが必要である。

最後に，以上の議論を簡単にまとめる。

（1） ストレッサー，ハーディネスと精神的健康との関係性のモデル化に関して，本研究は従来のストレッサー緩衝モデルから，パーソナリティの健康に対する主効果および間接効果モデルに転換し，理論化すべきであることを示唆している。

（2） 本研究は横断的研究であり因果関係の特定ができないので，今後，同一被験者を対象にして縦断的研究をし，研究結果を洗練することが必要である。

（3） ハーディネスを高い信頼性と妥当性をもって測定できる尺度を開発する必要がある。

付記：本研究は，株式会社内田洋行知的生産研究所が行った「困難に打ち勝つパーソナリティ」研究調査プロジェクトにおける第二筆者の報告書の一部を，第一筆者が加筆修正したものである。調査にあたっては，慶應義塾大学文学部山本和郎教授，株式会社内田洋行知的生産性研究所の東條寮主任研究員に御指導，御協力戴きました。そして City University of New York の Dr. Suzanne Kobasa には 50 項目のハーディネス尺度を使用する許可を戴きました。心から感謝申し上げます。

文　　献

Allport, G. W. (1955). Becoming: Basic considerations for a psychology of personality. New Haven: Yale University Press. (豊沢登訳，1959，人間の形成．理想社)

Allred, K. D., & Smith, T. W. (1989). The hardy personality: Cognitive and psychological responses to evaluative threat. Journal of Personality and Social Psychology, 56, 257-266.

Cohen, S., & Edwards, J. R. (1989). Personality characteristics as moderators of the relationships between stress and disorder. In Neufeld (Ed.), Advances in the investigation of psychological stress. New York: Wiley.

Deci, E. L. (1975). Intrinsic motivation. New York: Plenum. (安藤延男・石田梅男訳，1980，内発的動機づけ．誠信書房)

Fromm, E. (1947). Man for himself. New York: Holt, Rinchart & Winston. (谷口隆之助・早坂泰次郎訳，1955，人間における自由．創元社)

Funk, S. C., & Houston, K. (1987). A critical analysis of the hardiness scale's validity and utility. Journal of Personality and Social Psychology, 53, 572-578.

Gotlib, I. H. (1984). Depression and general psychopathology in university students. Journal of Abnormal Psychology, 93, 19-30.

Hendrickson, A. E., & White, P. O. (1964). Promax: A quick method for rotation to oblique simple structure. British Journal of Statistical Psychology, 17, 65-70.

Holmes, T. H., & Rahe, R. H. (1967). The social readjustment rating scale. Journal of Psychosomatic Research, 11, 213-218.

Hull, J. G., Van Treueren, R. R., & Virnelli, S. (1987). Hardiness and health: A critique and alternative approach. Journal of Personality and Social Psychology, 53, 518-530.

Hunt, J. (1965). Intrinsic motivation and its role in psychological development. Nebraska Symposium on Moivation, 13, 189-282.

Kobasa, S. C. (1979a). Personality and resistance to illness. American Journal of Community Psychology, 7, 413-423.

Kobasa, S. C. (1979b) Stressful life events, personality, and health: An inquiry into hardiness. Journal of Personality and Social Psychology, 37, 1-11.

Kobasa, S. C. (1982). Commitment and coping in stress resistance among lawyers. Journal of Personality and Social Psychology, 42, 707-717

Kobasa, S. C., Maddi, S. R., & Courington, S. (1981). Personality and constitution as mediation in the stress-illness relationship. Journal of Health and Social Behavior, 22, 368-378.

Kobasa, S. C., Maddi, S. R., & Kahn, S. (1982). Hardiness and health: A prospective study. Journal of Personality and Social Psychology, 42, 168-177.

Kobasa, S. C., Maddi, S. R., & Zola, M. A. (1983). Type A and hardiness. Journal of Behavioral Medicine, 6, 41-51.

Kobasa, S. C., & Puccetti, M. C. (1983). Personality and social resources in stress resistance. Journal of Personality and Social Psychology, 45, 839-850.

Kobasa, S. C., Maddi, S. R., Puccetti, M. C., & Zola, M. A. (1985). Effectiveness of hardiness, exercise, and social support as resources against

illness. Journal of Psychosomatic research, 29, 525-533.

Maddi, S. R. (1970). The search for meaning. Nebraska Symposium on Motivation, 18, 137-186.

Maddi, S. R. (1987). Hardiness training at Illinois Bell Telephone. In J. P. Opatz (Ed.), Health promotion evaluation: Measuring the organizational impact (pp. 101-115). Stevens Point, WI: University of Wisconsin.

Maddi, S. R. (1988). On the problem of accepting facticity and pursuing possibility. In S. B. Messer, L. A. Sass, & R. L. Woolfolk (Eds.), Hermeneutics and psychological theory: Interpretive perspectives on personality, psychotherapy and psychopathology. New Brunswick, New Jersey: Rutgers University Press.

Maddi, S. R. (1989). Personality theories: A comparative analysis (5th ed.). California: Brooks/Cole.

Maslow, A. H. (1970). Motivation and personality (2nd ed.). New York: Harper & Row. (小口忠彦監訳, 1971, 人間性の心理学. 産業能率大学出版部)

Rabkin, J. G., & Struening, E. L. (1976). Life events, stress, and illness. Science, 194, 1013-1020.

Rhodewalt, F., & Agustsdottir, S. (1984). On the relationship of hardiness to the type A behavior pattern: Perception of life events versus coping with life events. Journal of Research in Personality, 18, 212-223.

Rhodewalt, F., & Zone, J. B. (1989). Appraisal of life change, depression, and illness in hardy and nonhardy women. Journal of Personality and Social Psychology, 56, 81-88.

Rogers, C. R. (1961). On becoming a person: A therapist's view of psychotherapy. Boston: Houghton Millfin. (村山正治編訳, 1967, 人間論, 岩崎学術出版社)

Schmied, L. A., & Lawler, K. A. (1986). Hardiness, type A behavior, and the stress-illness relation in working women. Journal of Personality and Social Psychology, 51, 1218-1223.

清水秀美・今栄国晴 (1981). State-trait Anxiety inventory の日本語版 (大学生用) の作成. 教育心理学研究, 29, 348-353.

白樫三四郎 (1988). 管理監督者の職務ストレス. 狩野素朗編, 昭和 62 年度科学研究費補助金 (総合研究A) 研究成果報告書「高度技術化社会における人間組織の対応に関する社会心理学的研究」, 35-42.

Tanaka-Matsumi, J., & Kameoka, V. (1986). Reliability and concurrent validities of popular self report measures of depression, anxiety, and social desirability. Journal of Consulting and Clinical Psychology, 54, 328-333.

植村勝彦 (1985). 生活ストレスの測定. 石原邦雄・山本和郎・坂本 弘編, 生活ストレスとは何か, 垣内出版, 128-152.

Watson, D., & Clark, L. A. (1984). Negative affectivity: Disposition to experience aversive emotional states. Psychological Bulletin, 96, 465-502.

White, R. W. (1959). Motivation reconsidered: The concept of competence. Psychological Review, 66, 297-333.

Wiebe, D. J., & McCallum, D. M. (1986). Health practices and hardiness as mediators in the stress-illness relationship. Health Psychology, 5, 425-438.

吉田 悟 (1991). 外的統制感, 自己決定感, ストレッサーと心理的健康との関連性: 管理職者を対象にした調査研究. 応用心理学研究, 16, 29-36.

Zimmerman, M. (1983). Methodological issues in the assessment of life events: A review of issues and research. Clinical Psychological Review, 3, 339-370.